

# 三瓶で疎開生活

NPOローハスクラブPEACEプロジェクト



「東日本大震災」の影響は、被災地東北だけでなく、子どもを持つ全国の親にとって、大きな不安を抱えるようになりました。

関東圏域からの疎開、子どもたちを放射能から守る取組みとして、NPOに所属する大田市出身の歌手、梶谷美由紀さんたち親子7世帯が大田での暮らしを実現し、この取組みを全国へ情報発信することで、被災地を含め多くの方の支えになっていくことを目指しています。

## 大きな不安から逃れ 田舎への疎開

東日本大震災は、地震と津波による甚大な被害を多くのの人に与えました。

特に福島県にある東京電力福島原子力発電所の被災により、放射能の影響が広範囲にわたり、避難を余儀

梶谷美由紀さんが、疎開プロジェクトの一環として、出身地の大田市において、自ら夏休み期間中に保養活動を始めました。

## 活動を通じて 被災地支援

福島県周辺での放射線の飛散はメディアでも大きく紹介されていますが、放射線は五感で感じることでできないため、影響を心配し、関東圏域でも生活に不安を感じている人がいます。

東京で暮らしている梶谷さん親子を含む計7家族18人（子ども11人、うち小学生7人）が、元社員保養施設「ログ三瓶」を利用して、都会を離れ、自然豊かな大田



▲暑い夏の子どもの遊びは、やはり「水遊び」です。三瓶の水の冷たさに、はしゃぐ声も悲鳴に聞こえます

市三瓶町志学に移動し、いわゆる「疎開」生活を始めたのは8月初旬。放射能の影響による健康不安を抱えた関東の子どもたちを転地療養させることで、被災地への情報発信と福島・関東の子どもたちの疎開・保養を促すきっかけになればとの梶谷さんの思いからでした。

地元志学の自治会長、鈴木英晃さんは、「何よりもここ三瓶町志学を好きになっていただきたい、田舎をゆつくり満喫し、元気になっていただければ」と大歓迎です。

梶谷さんたちは、すでに東北、関東から疎開・移住をして来た方同士のコミュニティ作りにも力を入れました。

## 地域と交わり 新しい仲間も



近所のお蕎麦屋さん（沙羅）のご主人、児玉さんが、子どもたちへ手打ちそばを手ほどき、蕎麦粉にまみれながら奮闘しました

活動の拠点となった「ログ三瓶」には、地元の野菜の差し入れなど、温かいおもてなしに感謝の日々が続き、近所の方を招いた夕食会を開くこともありました。

お盆には、志学の盆踊りに全員参加。地域の皆さんと一緒に楽しく時間を過ごしたり、近くの農園の野菜や果物の収穫体験にも参加しました。

また、疎開プロジェクトの情報聞いた周辺市町村や県外からも多くの人が訪



▲子ご美の里でのそうめん流しのおもてなしに、子どもたちは、ビックリ。福島の子と一緒においしくいただきました

れ、交流も行われました。  
なかでも、山口町の「子ご美の里」へ福島県から保養に来ていた母子4人が、里の主宰者、矢田千里さんと「ログ三瓶」へ訪れ、矢田さんのお誘いで、一緒に流しそうめんや、餅つきなどを体験したことは、子どもたちにとつて貴重な出会いになりました。



矢田さん特製、古民家の囲炉裏で焼くお餅の味に感動。食欲も進みました(子ご美の里)

### 疎開活動から一時・定住へ

夏休みの保養生活を過ごしている中で、梶谷さんたち母親たちの心は次第に動きました。

「子どもたちを東京へ戻せない。このまま大田に残りたい」心境の変化は子どもたちにも伝わり、家族の理解と協力も得られ、地元小学校への転校を決意。一時、定住へ向けて動き出しました。

この夏、疎開プロジェクトの拠点となった「ログ三瓶」も、貸借期限の延長が今年末まで認められ、二期から東京からの転校手続きを終えた3家族8人の田舎暮らしが始まりました。



【ログ三瓶】  
この度の震災で、株式会社レビ新広島より大田市へ対し、所有する元社員保養施設(三瓶町志学)の無償貸与の申し出を受けていました。  
今回の取り組みのために快く活用を承諾され、大田市が借入し、NPOローハスクラブへ貸与することとなりました。

小学生4人は、徒歩で5分のところにある地元志学小学校へ。全校生徒20人の学校へ東京の同じ小学校から4人の転校生は前代未聞です。早くも友達ができ、楽しい学校生活をのびのびと過ごしています。  
これから三瓶は寒い季節を迎えます。そろそろ冬支度をとお母さんの心配をよそに、子どもたち4人は、今日も元気に学校へ通っています。



▲鈴垣さんのブルーベリー農園にて

3月11日以降、我が子の体調不良をきっかけに、東京から西日本、いわゆる「疎開生活」を覚悟したのは7月初め。私のふるさと大田市を選んだのは、ここ数年、東京の暮らしに行き詰まりを感じ始めていた自分にとって自然な流れでした。

私と同じように、お子さんの健康に不安を感じている友人知人が多かったこともあり、数家族でシェアして過ごせる仮住まいを探していたところ、快く「ログ三瓶」を貸していただき、7母子18人の暮らしが始まりました。  
地元志学では、ご近所の方にとつても親切にしてください

き、楽しい時間を共有できました。畑で採れたお野菜、お米なども沢山いただきました。私たちの東京からの声だけでなく、福島県の現状を知ってもらつたため、ログ三瓶を会

場に、私が活動する「子どもたちを放射能から守る全国ネット」の仲間で、福島からの子どもとの疎開を進めている「ハーメルンプロジェクト」代表、志田守さんのお話も開催しました。

9月になり、保養を終えた皆さんのその後ですが、私を含め3母子が東京からの本格移住を決めました。  
子どもたちの転校先は、ビルの谷間から、緑豊かな自然の中へ。学校では早速、宿泊体験に参加し、三瓶登山も経験しました。

保養生活を終え東京へ戻った親子さんも、定期的に三瓶へ訪れることになり、9月にお試し保養に来た方がもう一人、三瓶を気に入り、11月から合流予定です。

今後は、もっともっと沢山の子どもたちに、ここ三瓶で思いっきり深呼吸し、のびのびと保養してほしい。私たちの暮らしをいたお台場と三瓶をつなぐ試みや、三瓶の美味しくて安全な野菜やお米を関東や福島の子どもたち食べてもらつことも考えていきたいです。

ここログ三瓶が人と人、都会と田舎を結ぶ「かけ橋」になるために出来ること、地元の皆さんや新しい仲間たちと一緒に考えていけたら、とても嬉しいです。(梶谷美由紀)